

奈良県教育振興大綱基本理念		育人 ～県民一人一人が学び、育ち合い、潜在力を最大限引き出す～				総合評価
教育目標		豊かな潜在能力を開花させ、知の創造を高め、豊かな感性を磨く。				
学校経営方針		進路第一希望の実現、人間力の向上				
昨年度の成果と課題		平成31年度本校教育のキーワード	具体的目標			A
<p>思考力・判断力・表現力等の能力を培うアクティブ・ラーニングを軸とした授業改善の取組、GTEC導入など高大接続改革への対応、生徒会を中心とした生徒の主体的な活動、特別な支援を必要とする生徒への細やかな対応、地域との連携をはじめ、学校教育全般において所期の目標を達成することができ、学校評議員会においても評価をいただいた。</p> <p>課題としては、キャリア教育に関わって、進路実現に主体的かつ継続的に取り組む生徒の実践力を高めること、高大接続改革に関わって、教員が理解を深め、同時に生徒・保護者に具体的な情報を提供することがあげられる。また、本校が避難所となっていることを踏まえ、地域との連携の一層の強化も必要となる。</p> <p>こうした取組をはじめ、日々の生徒の活動全般を通して、橿原高校の特色を鮮明にしていく必要がある。</p>		<h1>挑戦</h1>		大きな志を持ち、夢の実現に邁進する生徒に育てる。		
				「克己」の精神を身につけ、易きに流れず努力する姿勢を育てる。		
				発想の起点を変え、物事を多角的に考える。		
				「目標をかなえる」「自分には絶対にできる」という信念をもつ生徒に育てる。		
		<h1>信念 環境</h1>		教訓をポジティブに生かして、次につなげる能力を養う。		
				能力を十分に発揮できる環境づくりを行う意識と能力を養う。		
				「人権教育推進プラン」を踏まえた教育を推進し、互いを大切にする人間関係を育む。		
	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
(1) 学校運営	意欲を持って学校生活に取り組む生徒を育てる。	<p>各教員がアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業を行うことにより、基礎的な知識・技能の獲得に加えて、生徒の思考力・判断力・表現力等の能力の伸長を図る。</p> <p>また、進路実現に向けて、生徒が、自己の置かれた環境を整えて主体的に目標に挑戦する実践力を伸ばせるよう、各教科の授業、総合的な学習・探究の時間、特別活動など、あらゆる教育活動をとおしてサポートする。</p> <p>授業アンケートにおいて「受け身でなく能動的に授業に取り組んでいる」が、12月の調査で55%以上であればA、45%未満であればC。</p> <p>橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」が5ポイント以上あればA、4ポイント未満であればC。</p>	A	<p>12月の授業アンケートにおいて「能動的に授業に取り組んでいる」の項目が56.7%であった。成績上位の生徒の中には、授業でのペアあるいはグループでの学習形態により学習意欲が高まると感じている生徒もあり、授業における「主体的・対話的で深い学び」を促すアクティブ・ラーニングやICTを活用する授業を一層推進していく必要がある。</p> <p>橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」は5.6ポイントで、昨年と比較して0.1ポイント上昇した。</p> <p>一方で、授業の予習・復習を行う生徒は約25%に過ぎず、部活動と勉強についての達成感を更に高めるために授業の内容・展開方法を検討・改善する必要がある。</p>	<p>授業アンケートで「能動的に授業に取り組んでいる」と回答した生徒の割合は、ここ2年間、57～59%の間で推移している。この状況を改善するため、アクティブ・ラーニングやICTの活用、前時の授業内容の復習と発展学習で始まる授業展開の導入等により、「能動的に授業と家庭学習に取り組む態度」を育成する。</p> <p>また、授業内容・展開に関する教科内の協議、部活動と勉強についての達成感を高めるための学年内の協議を活発に行い、教員が一層連携し、意欲的に生徒の指導・助言にあたる体制作りを推進する。</p>	<p>教職員研修への積極的な姿勢が、生徒の指導に対して良い影響を与えている。不断の取組を評価したい。</p> <p>授業の予習・復習の継続、学習と部活動との両立には生徒自身の強い意志が求められる。生徒の意欲をより高めるためにも日々の教育活動実践に研修の成果を反映させる更なる取組を推進してほしい。</p> <p>そのことで学力向上はもとより人間力の向上をはかってもらいたい。</p>
	「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	<p>教職員が教育研究所等の研修会、教科や高大接続改革をはじめとするキャリア教育等に関わる研究会に積極的に参加し、その研修の成果を教職員間で共有できる状況をつくる。</p> <p>校内研修においては、高大接続改革、生徒指導の在り方等、今日的な課題をテーマとした研修を実施する。</p>	A	<p>校内全体研修として、高大接続改革対応、生徒指導の在り方、アレルギー緊急時対応、部落史の見直しと教育内容の創造、教育相談についての研修を実施した。また、校外研修では、学習指導、生徒指導、教育相談、進路指導、人権教育、クラブ指導等に関わって、教員一人当たりで約6回、全教員で延べ320回の研修を受講し、日々の教育活動の実践に活かすことができた。</p>	<p>キャリア教育、生徒指導、人権教育、教育相談、アレルギー対応等の今日的課題に対する研修に加え、来年度は、修学旅行での感染症発生時対応についても、緊急対応マニュアルを作成し適切に対応するために、事前研修を行う。</p>	

	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
(2) 学習指導	時間の有効活用と授業における集中度を高める魅力ある授業を展開する。	部活動と学習のけじめを意識的につけさせ、限りある時間を有効活用させる。授業アンケートにおいて「集中して授業に取り組んでいる」が80%以上でA、60%以下でC。	B	B	授業アンケートにおいて、「集中して授業に取り組んでいる」と答えた生徒の割合は77.9%であった。生徒は概ね授業に集中して取り組んでいるが、授業内容を十分理解できず、集中できていない生徒が全くいないとはいえない現状である。	考查等で不振だった生徒に対して、積極的に補充を行い、クラス全体の学力の底上げを図っていかねばならない。	集中して授業に取り組んでいる生徒が多いことを好ましく思う。家庭学習時間の不足を感じるが、カフェで学習をする時代となり、指導の難しさを察する。粘り強い補充対策を期待する。
	家庭学習を促進する。（平日の家庭学習時間1時間未満の生徒を減らす）	学校での授業を大切にさせるとともに、家庭学習の重要性を認識させ、「予習→授業→復習」の学習サイクルを定着させる。糧高生活アンケートにおいて「平日の家庭学習時間が1時間未満」が15%以下であればA、30%以上でC。	C		平日の家庭学習時間0分が11.5%、30分未満が13.9%、1時間未満が17.4%で家庭学習の不足している生徒が昨年よりも多く見られる。一方で4時間以上は13.7%で昨年度より増加している。	日々の学習においては課題や小テストを工夫して積極的に実施していかなければならない。生徒自ら主体的に学習に取り組むことが、将来の進路実現につながることを繰り返し伝達し学習意欲を喚起していく必要がある。	
(3) 生徒指導 教育相談 生徒会 活動	生徒の基本的な生活習慣を確立させることから、克己の精神を育む。	生徒の遅刻回数の減少に努める。年間遅刻回数を昨年度比2ポイント以上の減でA、2ポイント以上の増でC。	A	A	昨年に比べ、遅刻総数が約1割近く減少した。先生方の立哨指導の下、余裕を持って登校しているように感じられる。	欠席、遅刻、早退を減らす各クラスでの具体的な目標の標榜。 達成感を感じることができ委員会活動の見直し。 より満足度が高くなるようなボランティアや地域貢献活動の見直しや継続。	遅刻が減ったことは大いに結構である。 地元地区での共働活動や歴史に憩う榎原市博物館等の活動等は、地域住民には高く評価されている。評価を生徒にフィードバックしてあげてほしい。
	地域や学校での行事等に、生徒会や生徒会各種委員会が積極的に参加し、主体的に学校生活を構築したり社会貢献に努める姿勢を醸成する。	保護者アンケートにおいて「学校の雰囲気がよく、生き生きとしている」が昨年度比3ポイント以上の増でA、5ポイント以上の減でC。	B		2.5ポイントの上昇があったことから、生徒たちが楽しくが充実した学校生活を送っていると考えられる。 委員会活動や部活動において、生徒が主体的に行動するよう、活動内容を絶えず見直ししていきたい。		
(4) 進路指導 キャリア 教育	生徒の進路第一希望の実現を図る。	各教科の授業、総合的な学習(探究)の時間、特別活動、充実講座等を通して、生徒の主体的に物事に取り組む姿勢と学力の向上を図り、進路第一希望の実現を目指す。生徒のやる気を高め、自己の目標に向かって粘り強く挑戦し続ける姿勢を育てる環境を整えることを重視する。 進路実現に関する卒業時アンケートで、3年生の進路決定先満足度が50%以上かつ本校の進路指導に対する3年生保護者の満足度が70%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が50%未満でC。	A	A	進路日より「Will」をはじめ、生徒・保護者に進路情報誌を適時に配付した。「Will」は年4回、考査成績郵送と三者面談等に合わせて発行し、情報提供に努めた。 校外模試や進路講演会等を計画的に実施し、特に1・2年生は部活動に影響が出にくい平日実施で全員が受験できるように体制を整えた。 充実講座を計画どおり実施したが、3年生の2学期以降の受講数が年々減少した。	進路日より「Will」や各種進路情報誌により、高大接続改革や進路全般に関する最新情報を生徒・保護者に適切に提供する。 SHR、LHR、DSの時間を活用することで、自身の進路実現に適切な内容を有効に活用できるように促す。 模試の返却・活用方法を工夫することで、実力の定着化を図る。 現3年生の充実講座に関するアンケート結果を参考に、今後の実施方法(内容・レベル・時間等)を見直す。	進路講演会や校外模試の実施方法の工夫が生徒の意欲向上につながり、生徒自らによる「将来の生き方を考える活動」への導きをさらに強められると考えられる。 具体的に示されている改善方法を、次年度以降に実践することで、より一層生徒・保護者の期待に応える教育内容の充実を図ってほしい。
	キャリア教育を促進する。	各教科の毎授業、総合的な学習(探究)の時間、特別活動に加え、進路講演会、各種説明会等の開催及び振り返り学習や進路情報の提供、インターンシップ等の体験的な学び等を通してキャリア教育を推進し、主体的に自己実現を図る姿勢を育むことで、総合的な力が身につくよう人間力の向上を目指す。 キャリア教育・進路情報に関する卒業時アンケートで、3年生の満足度が50%以上かつ3年生保護者の満足度が70%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が50%未満でC。	B		DSとLHRにおいて進路分野に関する内容を実施したが、リテラシー・コンピテンシーを育成する展開に再考の余地がある。 進路実現のために、自己分析と適性(学問・職業)理解に基づいて主体的・能動的に自己実現を図る契機として「学びみらいPASS」を実施し、振り返り講演会も併せて実施した。 保護者対象の進路講演会及び生徒対象の進路講演会や大学・医療看護系・就職公務員希望のガイダンスを適時に実施した。 大学ミニ講義として「糧高大学」を土日開催から平日実施に変更した。 インターンシップ及び看護体験研修参加を幅広く呼びかけた。等々	進路学習は、高校3年間を見通した内容でバランスよく設定する。進路講演会を求められる学力、高大接続改革等を勘案して、よりタイムリーな内容で開催する。 糧高大学を契機に、主体性をもって能動的に活動できるよう上級学校でのオープンキャンパス・講義体験等への参加を促し、目的意識をもって日常の活動が送れるようにする。 自己の活動記録(ポートフォリオやキャリアパスポート等)を活用することで、学校、家庭及び地域における学習や生活の見直しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を自ら行うことができるよう働きかける。	
(5) 人権教育	人権教育ホームルーム及び学年人権講演会の内容を充実させ、多様な人々の思いや願いを理解するとともに、自分の命も他人の命も大切にできる生徒を育てる。	参加体験型のホームルームを継続して実施するとともに、1年生で高齢者の人権、3年生で労働者の権利、外国人との共生についての内容をとり入れる。人権教育日より「今月の言葉」の内容を工夫し、裏面に昨年度の人権作文の優秀作品を掲載することで、生徒の人権意識をさらに向上させる。「3年人権学習アンケート」で肯定的な回答が75%以上でA、50%未満でC。	A	A	今年度より1年で高齢者の人権、3年で労働者の権利、外国人との共生についての内容をとり入れ、今日的な課題を考えさせることができた。「今月の言葉」の裏面に昨年度の人権作文の優秀作品を掲載して生徒全員が読めるようにした。3年人権学習アンケートで肯定的な回答をした生徒の割合が82%であった。	人権ホームルームをより充実させるため、各学年で生徒が主体的に取り組める参加体験型学習を増やしていく。生徒にインパクトのある講師を選定して、11月に全校人権講演会を実施する。「今月の言葉」の内容を生徒がしっかりと読めるものに一層工夫し、毎月11日の人権を確かめあう日に配布する。	自分の命も他人の命も大切にすること。すべての生徒、教職員が豊かな人権感覚を有するように、これまでの取組を継続してほしい。
	教職員の校内及び校外での研修の機会と内容の充実を図り、それらを積極的に利用して人権感覚を磨き、生徒への指導に生かせるように努める。	校内研修は、全体研修を年1回、学年研修を各学期1～2回実施する。校外研修は、高人教等主催の研修に積極的に参加してもらう。以上の研修をすべて実施できればB以上、さらに、職員人権研修に教員の80%以上が出席すればA、いずれも不十分であればC。	A		校内全体研修は、8月に県立同和問題関係史料センター所長の奥本武裕さんを講師に「部落史の見直しと教育内容の創造」をテーマに実施した。学年研修は、人権ホームルーム実施前に毎回実施した。校外研修では、高人教及び県外教等の研修会に多くの教員が積極的に参加できた。	教員の人権意識向上のため、今日的な課題で講師を選定して、8月に全体研修を実施する。	

	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
(6) 文化図書教育	本を読む楽しさと文字に親しむ習慣を身につけ、豊かな感性と教養を育む。	週2回（各15分）のSSR（持続的黙読）を軸に、読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって本に親しむ習慣を育てる。榎高生生活アンケートで「SSRについて」の満足度が6.5ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	B	A	生徒、教員ともにSSRを肯定的に受け止める声が多くなり、特にSSRが朝の時間帯になってからは、1限目授業への良い影響も見受けられる。	「普段読まないで・読む機会がないので」などを前提に「SSRはよかった」と述べる生徒も多く、読書の習慣化というには、まだまだ不十分である。教室移動や教員の1限目授業への対応も解消されておらず、今後検討を続けていかなければならない。	SSR、別途配布された「図書館だより」の内容等、充実した取組がなされている。引き続きの活動をお願いしたい。
	文化活動を充実し、生徒の知性と創造力を育成する。	文化行事をとらして知的好奇心・創造力を育て、高校生としてふさわしい文化意識の獲得を目指す。学校全体の取組として、年間4回以上の文化行事等を実施でA、2回以下でC。	A		若雉子祭（9月）、朗読を聴く会（10月）、芸術鑑賞会（11月）図書館文化講座（1月）、百人一首かるた大会（1月）を実施した。いずれの行事も生徒の創造性や知的好奇心の伸長につながった。若雉子祭の準備日程などに不十分なものもあり課題である。	実施要綱や委員会での配布物がクラス全体への伝達を周知徹底できるようにさらに丁寧な説明を心がけていく。	
(7) 体育健康教育	全生徒が、充実した高校生活を送れるよう、健康・安全教育を推進する。また、体力の向上を更に図る。	学校保健委員会を開き、生徒の健康・体力の状況について実情を精査し、改善を図る。また、「保健だより」の発行により、生徒個々の健康に関する意識を高める。体力テストの結果において、各学年男女別で全国平均を10項目以上上回った場合A、3項目以下の場合C。	B	A	「ほけんだより」を月1回発行することにより、生徒自身の健康面での自己管理を促した。特に、熱中症予防対策や種々の感染症対策についてポスター掲示とともに情報提供に努めた。体力テストにおいては、各学年男女とも全国平均値と大幅な差異は無いが、握力・立ち幅とびがやや劣り、筋力・瞬発力の向上を図る必要があると考える。	近年、増加している種々のアレルギー疾患や健康維持に欠くことのできない睡眠・栄養面での情報をより詳細に提供していく。 体力テストの結果を踏まえ、体育実技及び運動部活動においても全生徒の体力・筋力の向上が図れるようトレーニング法を研究・工夫していく。	情報提供に努め、生徒による自己管理促進や予防対策の充実がみられ、良としたい。 体力・筋力の向上工夫に期待したい。
	保健体育行事において、生徒が自主的かつ主体的に参加できるように工夫する。	榎高生活アンケートで「球技大会」、「体育大会」「クロスカントリー大会」の3項目の満足度平均が6.0ポイント以上でA、4.0ポイント未満でC。	A		「球技大会」・「体育大会」は生徒の満足度が高く、積極的な取組が本年度も見られた。「クロスカントリー大会」では、例年以上に記録や順位に挑戦しているとする生徒が多くなった。	体育的行事は、生徒の「安全」が不可欠であるので、次年度も更に十分な配慮がなされた企画・運営を心掛けていく。	
(8) 環境整備 防災教育	学習に専念できるよう、生徒が自分たちの手で校内の美化ができる姿勢を養う。	「汚さない、ゴミを出さない」指導を行い、日常の清掃活動をとらして生徒の美化意識を高める。榎高生活アンケートで「校内環境美化につとめた」が6.0ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	B	A	アンケートより86%以上の保護者が環境美化、清掃が十分できていると評価している。大掃除では、まず身の回り（私物、机、イス、ロッカー）の整理から始めるよう計画したが、日頃から整理をする習慣へとつながることができない生徒もいた。	校外内の美化意識を高める継続的な指導。環境整備委員会活動の継続と活性化を図る。	保護者の評価と同様で、美化・清掃が行き届いている。 榎高高校体育館が避難所に指定されていることを踏まえて、地域とともに日頃から防災・減災意識をより高めていくことが求められる。
	震災、火災等に備えるための避難訓練などをとらして自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	生徒の防災意識を高める避難訓練を実施し、自らの身を守る行動を身につけるとともに、各教科においても機会あるごとに防災意識を高める取組を行う。訓練実施後の生徒アンケートで「防災について理解できたが」70%以上でA、50%以上でB、50%未満でC。	A		防災訓練は、地震を想定して行い、避難経路の安全確認、地震発生直後の防御姿勢に重点をおいた。実際の避難では、周囲の状況を的確に把握し、適切な場所への避難が求められる。今年は雨天のため、避難場所を体育館に変更したが、スムーズに実施できた。	日頃からの防災意識を高めるため、避難訓練・シェイクアウト訓練に加えて、あらゆる機会をつかって防災、減災に向けた呼びかけを行っていく。	
(9) 学校評価 広報	本校独自の教育内容の構築に努めるため、学校評価のシステムを検討し実施する。	生徒による授業アンケートを年2回、榎高生活アンケートを年1回。保護者によるアンケートを年1回実施し、集約結果を報告する。あわせて学校評議員による外部評価を実施する。	A	A	各アンケートの集約結果は自己評価、外部評価の資料として利用した。学校評議員制度廃止に伴い、次年度の外部評価方法が課題である。	これまでのアンケート結果を精査し、顕著な違いが現れるものについて原因を明らかにし、改善すべき点については具体策を検討する。	種々の資料から、広報活動の充実を評価する。 新しく始める外部評価方法が更なる開かれた学校作りの推進に寄与することを期待する。
	中学生への広報活動を積極的に行う。	中学校や塾に積極的に訪問し、より多くの中学生が本校を志望するよう広報内容の改善に努める。オープンスクール実施後のアンケートで「よかった」が80%以上でA、60%未満でC。	A		訪問中学校数58、進学説明会への参加数9であった。保護者アンケートの結果より、「ホームページを見る」との回答が3年前と比較して10.4ポイント増加した。	中学生、保護者が必要とする情報を的確に把握すること。ホームページの内容をできるだけ最新の状態に維持するための方策を検討する。	
(10) 国際理解 教育	国際理解教育の推進を図る。	ホームルーム・集会で国際理解に役立つ内容を扱う。外国の事情や外国人が日本をどのように見ているのかについて関心を高めることができるように、新聞を3回以上発行する。3回以上でA、0回でC。	A	A	日本の文化・自然等について外国人の感想・視点を取り上げる国際理解タイムズには、生徒の関心を喚起するために本校ALT（英語指導助手）による記事も掲載し、3回発行したが、活用方法についての検討が必要である。また国際理解教育に関する講演会として、世界遺産講演会（1年）、台湾文化セミナー（2年）、アイルランドの文化・教育・言語（3年）を開催したが、開催時期について再検討を要する。	国際理解タイムズの活用方法として、総合的な探究の時間や授業での活用について、その方途を検討する。 講演会については、実施学年と相談し、実施時期・内容を検討する。	海外修学旅行の効果が出始めている。グローバルな時代に生きる生徒諸君の国際交流意識が向上することが期待できる。
	国際交流行事への参加促進と海外修学旅行の充実を図る。	海外研修・短期長期留学事業の紹介に努める。国際理解教育の視点にたち、海外への修学旅行が有意義になるように総合的な学習（探究）の時間の内容を検討し、実施する。修学旅行後のアンケートで満足度が75%以上でA、50%未満でC。	A		海外修学旅行のアンケート結果によれば、満足度は87%と高かった。B&Sプログラムは昨年度からリーダーには英語が話せる留学生をお願いしている。生徒たちは興味や関心を持ち、英語で意思疎通をはかる努力をしており、効果が見られた。 海外研修・短期長期留学事業については教室掲示により適宜紹介した。夏期休業中2年生1名が2週間カナダでの語学研修に参加した。	交流校での生徒同士のプレゼント交換には、台湾の文化に配慮した手作りの品物を考えていく。交流行事として代表生徒の挨拶、いくつかのグループで行う舞台でのパフォーマンス、全員で参加する歌等を行ったが、今年度の反省も生かしながら、次年度の交流内容を検討したい。また、これまでの食物アレルギー対策に加え、次年度は感染症への対策も講じていきたい。	

	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
第1学年	基本的な生活習慣の確立と何事にも積極的に取り組む姿勢を身につける。	日常生活において、挨拶の習慣と正しいマナーを身につけさせる。年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていますと判断したらA。	A	A	学校内外を問わず、挨拶が身近になっており、大部分の生徒ができています。しかし、授業の開始時等においては、次第に礼や挨拶が雑になっている場面もある。	基本的な生活習慣や規範意識について、粘り強く指導を継続していく。	真新しい1年生にとって、すべてが大人への登竜門。生活習慣の確立は挨拶からである。駅前で地域住民による朝のあいさつ運動を実施した際、挨拶を返してくれない生徒が多くいるように思う。評価結果の分析を踏まえ改善方策を進められることを期待する。
		日々の授業を大切に、予習・復習・課題提出などを確実に実行させる。平日の学校外での学習時間が1時間以上とする生徒が70%以上でA。	B		授業を大切に組み組んでいる生徒が多い。その反面、考査前の学習に限られた生徒が多く、予習・復習の学習習慣が身につけていないのが課題である。	自己の目標を明確にし、何事にも主体的に取り組めるように指導していきたい。	
	人としての美しい心を養い、寛容の精神をもって人と接する姿を身につける。	人に対して思いやりのある行動ができる心を養う。自分にはない、他人の能力を認めることによって、お互いを尊重する心を養う。榎高生活アンケートにおいて「重点目標を達成しようと努力している」が70%以上でA。	A	A	クラスでの生活や部活動において、お互いを尊重する前向きな言動や行動が見られた。	お互いを尊重し、思いやりのある態度や行動が自然に出せる生徒を育てていきたい。	
第2学年	主体的な進路選択に取り組み、その実現に向け基本的な学力を身につける。	自ら進路を考え決めるための時間として、未来探求、ホームルーム、進路講演会、学年集会を合計10時間以上設定する。科目選択と模擬試験で、90%以上の生徒が志望をきちんと書いておればA。	A	A	年間16時間、進路を考える時間をもった。夏期休業中にオープンキャンパスに参加、レポートで報告させた。1月の模擬試験では全員が志望を書くことができた。少数だが迷っている生徒、保護者の理解が十分得られていない生徒へのきめ細かい対応が必要だ。	大学、専門学校、就職、個々の希望に応じた情報提供をする。特に、高大接続改革による新しい受験制度と受験生の動向をより正確に把握し、生徒・保護者に知らせる取り組みが必要だ。精神的に不安にならないよう留意することも求められる。	進路を見据えた勉学、部活動、学校行事等、多岐にわたった強い指導を応援する。メリハリをつけて、高校生活を楽しくようアドバイスを与えてもらいたい。
		「予習・授業・復習」の習慣化と基礎学力の定着に取り組ませる。校外の学習時間が1時間以上となるよう指導し、達成されていればA。	B		「予習・復習」をしている生徒は増えてきているが、その割合は高くない。学校のすきま時間に授業の準備や課題をする生徒の姿が見られるため、家庭においても学習できるはずだ。	真面目に学習する生徒がほとんどであり、授業を大切にすれば基礎学力は向上する。発展的な学力習得については、充実講座や模擬試験の復習を繰り返すよう促す。また、家庭学習が習慣となるよう強く指導する。	
	豊かな感性を磨く。	修学旅行とその関連行事を通して、外国の文化に興味関心を持ち、同世代の人との交流の意義を考える。事後アンケートで満足度90%以上の場合A。	B	A	満足度87%であったが、学校交流を通して97%が異文化を体験できたと感じ、82%が海外や世界に目を向けられるようになったと答えた。76%が事前の講演や交流に意義を感じている。	次年度は高校生活最後の年である。自己の進路実現に向け努力するなかで、お互いの進路希望も尊重し、one teamとして進路実現を目指す雰囲気作りをする。	
		部活動や修学旅行、体育大会・文化祭などの学校行事を通じて思いやりとお互いを尊重する心を養う。	A		修学旅行では、お互いの体調に気を配り行動した。また、学校交流ではホスピタリティについて学んだ。	部活動は最後までやりきりよう、学校行事は一丸となって楽しむよう、部活動、ホームルーム運営を計画し実行する。	
第3学年	進路実現に向け、基礎学力を確実に身につけ、実践的な学力の習得に結びつける。	LHR、学年集会、個人面談、各種講演会等を通して自分の進路をしっかり意識させ、自ら主体的に計画を立て、粘り強く取り組む気持ちをもたせる。年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていますと判断すればA。	A	A	進路実現に向けて生徒を中心に据えた計画を立て、粘り強く取り組む意識と機会を持たせることができた。	進路実現のために、生徒が落ち着いて学習する環境を作ることを、第一に考えてきた。今年度行ってきたことを継続して行っていくことが、よりよい改善につながると考える。	進路実現が一番のテーマである中、社会人として送り出すためにも、規範意識の向上、コミュニケーション力の充実等、課題は山積している。細やかな指導を期待する。
		本人及び保護者の理解と協力を得られるよう進路指導部と連携をはかりながら講演会等を計画し、進路・学年通信を定期的に発行する。また、丁寧な三者面談を心がける。年度末の学年総括で所属教員の70%ができていますと判断すればA。	A		生徒向けの講演会は、生徒が壁にぶつかったときに持つことができ、時期的にも内容的にも適正であった。また、年2回の保護者向け講演会も適正な時期に実施し、保護者とコミュニケーションをとることができた。進路・学年通信も定期的に発行することができた。		
		授業、充実講座、定期考査、模擬試験等を通して、基礎から発展的応用力、実践的な学力が身につくよう指導する。榎高生活アンケートにおいて「定期考査・模擬試験のやり直しをする」が50%以上ならA。	B		授業、充実講座など、学習時間を確保するように努めた。また、学習方法も基礎固めを強調したが、アンケートの結果からして定期考査、模擬試験が活用されていない。考査などの試験の活用を促していきたい。		
	『当たり前前を当たり前前しよう。』というスローガンのもと、すべての基礎となる生活習慣を身につけさせる	遅刻欠席を少なくし、規律正しい生活の実践を指導する。進路実現について、互いに励まし合う雰囲気作りを行う。榎高生活アンケートにおいて「重点目標を達成しようと努力している」が70%以上でA。	B	A	学年集会、HRなどを通じて、進路実現のためには、毎日の生活リズムが大切であると指導してきた。また、保護者にも、「生活リズムの大切さを、家庭でも指導してください。」とお願した。入試シーズンに入るまでは、遅刻欠席が少なかったが、11月以降遅刻欠席が増えるようになってきた。	生徒自身に毎日の生活リズムや、規範意識等の大事さを理解させるとともに、生徒を取り巻く環境の変化を考慮にいたった指導方法を検討する。	
最終学年として何事にも主体的に取り組むことで、公共心、規範意識の向上、他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力、自分らしい生き方を追求する力を養い、自立した一人の人間として、総合的な力が身につくよう指導する。		A	生徒自身が、自分の置かれている立場を自覚し、物事にあたることができている。服装、頭髪、SNSの利用について注意することもあったが、生徒個々が、お互いを気遣い目標に向かうことができた。				